

プレゼンテーション | 学生 → 企業

チーム名 TEAM KATU

提案 エモバイザー

チーム内のコミュニケーションがうまくいかず、全員が「居心地の悪い思い」をしたことから、会議中の人の感情を教えてくれるシステム「エモバイザー」を提案。エモバイザーとはemotionalとadviserを組み合わせた造語。表情や声のトーンから発言者の感情分析をすることで、お互いの感情を理解し会議をスムーズに進めることができ、居心地のよさを実現できる。

[参加学生]関口旺人、齊藤優奈、石坂啓介、長谷川拓朗



チーム名 TTF (The Team Final)

提案 ストレスチェックの見える化

人間関係の悩みについてアンケート調査を行った結果「パワハラ」に着目。パワハラのストレスは非常に高いことから、ストレスの度合を測る「ウェアラブル端末」を提案。そんなストレスを抱えている人を客観的に診断し、大事に至る前に相談したり、信頼を取り戻す努力ができることと説明。自分のメンタルヘルスが確認できれば、健康への意識も高まると強調した。

[参加学生]富樫兼史、川野嘉矩、松原 恵、田中聖哉



チーム名 Team Diversity KUTE

提案 Translator Glasses  
～見えない国境を越えていく～

言語や文化のギャップを解消する、メガネと翻訳機を一体化した「Translator Glasses」を提案。言語の翻訳だけでなく、パーソナルデータや言葉選びの分析もできることで、国境を越えたコミュニケーションを円滑にできると説明。さらに効果を上げるため、メガネから好みのにおいが出る仕掛けについて発表。審査員から「斬新なアイデア」と称賞の声があがった。

[参加学生]ナタング シャフタ、春山怜紀、兼平真央、佐藤龍生



「SDGs」に「居心地のよさ」をかけ合わせると?

SDGs (社会のゴール) × 居心地の良さ (自分たちが求めるもの) ~ライフ・イノベーション (可能性) で大学生と企業の価値観をつなぐ~

サステナビリティ目標を掲げ、ライフイノベーションを進める横河電機。「真の居心地のよさとは?」という難題に、工学院大学の学部生・院生が理系の頭で考え抜きました。

ストレスを「見える化」するのはどうかなあ



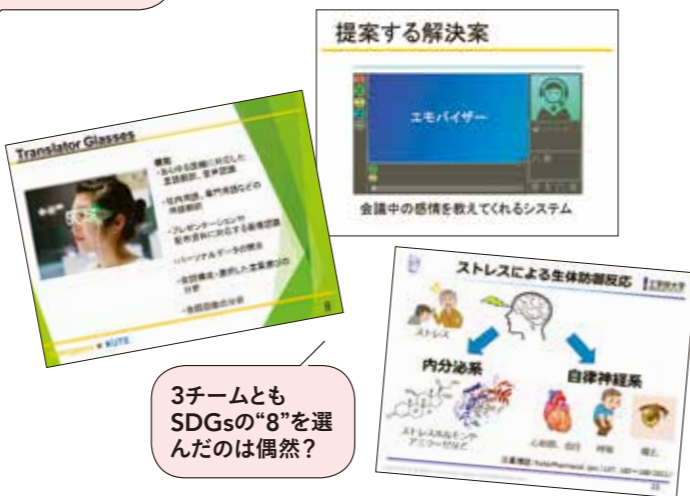
提案に響きかけます

中間発表では、学生が横河電機の担当者から「どこが斬新なの?」と聞かれる場面も。「厳しいと思っただけ、改善ポイントがクリアになった」

男子学生ばかりの環境には慣れてます



どのチームにも女子学生は一人。大学では圧倒的に女子学生が少ない環境に慣れていないため、今回は男子学生にひるむことなく、自分の考えを主張していました。「でも、女性の言い分、という価値観を男性に共感してもらえるような言い方は大事。努力したいですね。」



3チームともSDGsの「8」を選んだのは偶然?

SDGsをどう理解しストーリーを作るか  
横河電機は今年4月にライフイノベーション事業本部を設立しました。医療や食品産業向け事業を拡大し、人々の健康と安全で豊かな暮らしの実現に貢献することが目的です。オリエンテーションでは、制御・計測事業を主軸とする同社が、一見関係性が低いと思われるライフイノベーション事業に注力する理由と、課題への期待が提示されました。  
今回、この課題に取り組む学生12名のうち10名が大学院生。自己紹介では「細胞の質量分析に興味がある」「抗がん剤の耐性を研究している」など、専門性をアピールする姿も見られました。  
課題にある「SDGs」とは、国連で定めた「2030年までに達成したい17の持続可能な開発目標」のことです。これをどう解釈し、どんなストーリーを作り上げるのか。専門性の高い彼らへの期待が寄せられます。横河電機からは「SDGs」「ライフイノベーション」「ダイバーシティ」の3つの視点をおさえること、大学からは「院生だからこそ、事実」に着目することにご協力、科学的なアプローチをすることとハードルを上げられた学生たち。  
3チームすべて、アンケートをとって「居心地の良さとはな

にか」について現状把握をすることに。「働くうえでの居心地のよさを知るには離職者にアンケートをとろう」「まずは横河電機の社員に働く環境、ダイバーシティの考え方を聞こう」など、活発な意見が出ました。  
チームワークの大切さ  
身近な人へのインタビューなどで現状把握を行い、2回目のワークショップでは、各自が得た情報を共有しながら、「居心地の良さ」とは何なのか、ひたすら意見を出していきました。  
3回目は武田薬品が日本発のイノベーション創出エンジンをコンセプトに設立した「湘南ヘルスイノベーションパーク」にある「YOKOGAWA湘南ライフサイエンス・コ・イノベーションセンター」でのワークショップ。細胞研究の先端技術に触れ、興味深く質問する学生の姿もみられました。  
そして、いよいよ課題の解決策について、各自のアイデアを練り、解決策を絞っていきます。中間発表では担当者から「具体性が足りない」「もっと自分たちの研究に結びつける」といった厳しい指摘も。その講評と、集めた情報をもとに、各チームはストーリーの組み立てを見直し、さらにブラッシュアップさせていきます。  
留学生メンバーとの意思疎通に、できるだけ英語を使うなど気を遣い、結束が強くなるチー

ムもあれば、メンバー間のコミュニケーションがうまくとれず、前に進めなくなってしまうチームも。直前まで沈滞ムードでしたが、あえて自分たちの「この居心地の悪さ」に目を向けた時、それを武器にした提案が浮かび、一気にまともな提案が浮きました。  
こうして迎えたプレゼンテーション。総評では発想のユニークさや資料の完成度を高く評価され、「ビジネス提案としても価値がある」と称賛されました。

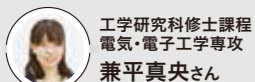
オリエンテーション | 企業 → 学生



課題説明の後、横河電機の各種計測器の展示があるデモルームを見学。学生は専門分野の研究や実験でも専用の計測器を使うことが多いこともあり、実際に使われている様々な計測器に興味津々の様子。その後、課題について理解を深めるため「居心地のよさは人によって違う」ことを知る診断テストに挑戦。考え方の志向の4タイプを知り、自分の好みを再確認。今回の課題に関連付けて、まず「だれのための居心地のよさにするのか」について、グループで意見を出し合いました。

<p>University / College</p> <p><b>工学院大学</b></p>  <p>1887年設立。4学部15学科をもつ工科大学総合大学として、「21世紀型ものづくり」を支えるリーダーとなる人材の育成をしている。</p>	<p>Company</p> <p><b>横河電機</b></p>  <p>1915年創立。国内最大の計測、制御、情報技術分野のバイオニアカンパニーとして、世界のマーケットを牽引する。</p>
--	---

PBLを終えて



工学研究科修士課程  
電気・電子工学専攻  
兼平真央さん

こんなに短期間にいろんな学科の人に会うことはないで、とても刺激を受けました。英語と日本語でプレゼン資料を作るのは大変でしたが、メンバー全員の共通理解のために役に立ち、そのことも居心地のよさにつながると感じました。



人財・総務本部 本部室長  
兼ダイバーシティ推進課長  
新井千之さん

どのチームも論点がはっきりしていたのがよかったです。資料作りも上手で、1ページに情報を詰め込み過ぎないのでもわかりやすかったですね。また、自分たちの苦しみからアイデアを出すのは非常に説得力がありました。